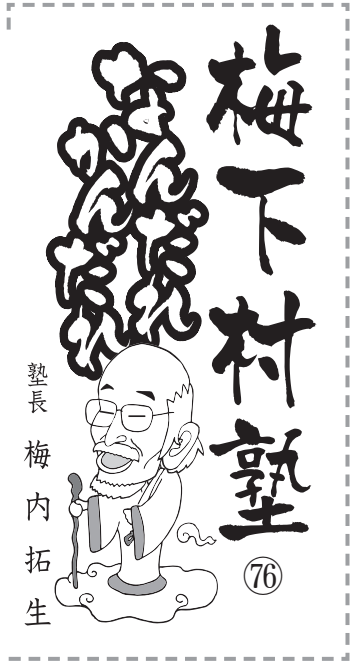
# 「森と水と命の惑星」国際会議

## ～地域と世界の心と魂を詠む～




### 芭蕉の俳句とセザンヌの絵はつながるか？(4)

（誌と詠）

2月24日（日）の朝5時に放映されたNHK教育テレビで生命誌研究者の中村佳子氏の話を聞いた。地球の誕生から46億年、生命の誕生から38億年、それから5億年後に生命は海から陸上へ生息範囲を拡大した。この生命の拡大運動を生命誌として追求することを目指していると述べていた。芭蕉は自然と人間の関係を俳句に詠んでつなげている。ここに、生命誌の「誌」と俳句の「詠」はつながっていると思った。すなわち、セザンヌが「ものの運動」を絵に表現したものと芭蕉が詠んだ俳句と生命誌の科学がつなっていると思った。

（復興への祈りと祭り）の4首から

齊藤陽子

立ち上がる力漲る被災地に子等が踊れるよさこいソーラン

津波跡の砂に埋もるる松毬を手もて掘り出す宝のように

返歌

被災地の祭りに子供らソーランぶし埋もる思い出砂から掘り出す

寺澤泰子

瓦礫より弾けて点る復興の焚き火は希望の明りとならむ

鎖り鎌もちて「地震を逮捕せむ」と五歳児が小さき躰に大きなる気迫

返歌

復興の思いはひとつ幼子の気迫も空へ焚き火は燃える

（復興への祈りと祭り）の4首からいろいろな歌謡曲が響いてくる。ペギー葉山の歌う（南国土佐を後にして）、石原裕次郎の（錆びたジャックナイフ）、伊藤久男の（イヨマンテのクマ祭り）。

歌謡曲には日常の生活の思いが込められており、祈りにもつながり、祭りにもつながります。復興への強い思いは祈りと祭りとつながって、むかしの若いころに歌った歌謡曲に重なって思いだされてきます。

帝政ロシア時代に逮捕されてシベリアの監獄で服役した経験を持つ、ロシアの小説家であるドストエフスキーは「死の家」を著述して、死の不安と強制労働、自由の拘束の中で「希望」について述べています。それは、心に「灯」をともすことです。「詠む」とは心に「灯」を点すことであると思います。

（東海新報記事から）

2月21日（木）の世迷言は「ロコモシンドローム」についてこれは、脚の筋肉、骨、筋などのバランスが欠けた結果の症状をいい、これを防ぐには、日ごろのしゃんとした姿勢であると述べている。これは脚だけでなく心の姿勢にも関係していると思う。

第6面の「好評　上向き地蔵　横田町女性団体が制作　陸前高田町」はなにげないなかに、心にくいばかりのセンスが感じられる。この記事を読むと、（復興への祈りと祭り）の心を飛行機事故で命を失った坂本　九ちゃんが「上を向いて歩こう」を口ずさんで歌っているいるイメージと重なって来るのである。気仙地方には「誌」、「詠」、「歌」とつながった文化と伝統が根に宿っていることを感じ、そして知った。みんなで力を合わせて、この気仙の文化と伝統を育てましょう。